千葉県誕生150周年記念企画展

地図は世につれ人につれ

プロローグ

戦いが無くなり人々が泰平の世を謳歌した江戸時代には実に多くの地図が作られました。地図は作成者の意図や使用する目的によってその大きさや範囲、掲載される情報が大きく変わります。本企画展ではそうした多くの地図が時代によって変化する土地の姿や、使う人によって変わる多様な地図、そこから垣間見られる人々の暮らしなどを読み取っていきます。

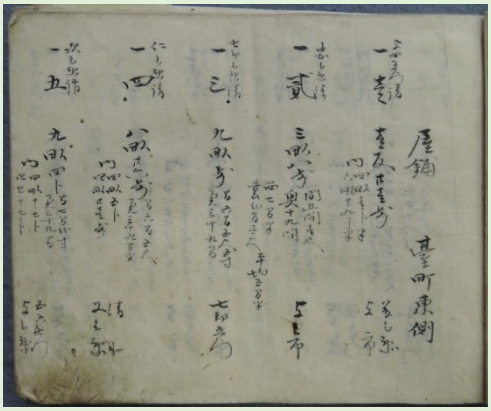
下総国絵図（各郡石高一覧） 当館蔵

江戸時代刊。102 ㎝×137 ㎝。千葉県が房総三国に分かれていた頃の下総国の絵図。郡ごとに色分けがされ、村を小判型、城を四角、河川は水色で描かれています。地図の西側に各郡と国全体の村数と石高が記載され、下総国は 1491 ケ村、56 万 8331 石とあります。正確な地形は描かれていませんが、当時の下総国の範囲や村の位置や名前、河川、湖沼の様子がわかります。

Ⅰ　支配の安定

豊臣秀吉によって全国が統一された後、徳川家康は慶長８年(1603）江戸に幕府を開きました。幕府や諸藩は支配の安定のため正確な土地の情報を必要としました。これは領主と領民との関係だけでなく、幕府と藩との関係でも同様に情報の提供が求められました。

土地の把握については農村の場合、村内の土地関係を示す最も基本的なものは検地帳（けんちちょう）です。検地帳は耕地に限定した基本情報ですが、村全体の把握には村明細帳が作られました。本章では、土地の情報が書かれた文書を紹介します。



東葛飾郡関宿台町屋敷帳之写　　当館蔵

関宿台町は関宿城下町の一つです。同町の土地所有に関する複数の文書を綴ったものの中に、寛文５年（1665）に作成した町内の屋敷についての検地帳が含まれています。地番毎に面積･所有者を記し、最後に土地の合計と年貢高を記載している。土地は 15 町８反余、年貢は 158 石余と記載されています。この中には光岳寺などの寺社地の一部も年貢対象地として計上されています。

Ⅱ　支配のための地図

地図作成の目的は、土地の大きさや形、近隣との境界、生産量などの土地の情報を得る他に、支配者の確認という意味がありました。

慶長５年(1600）関ヶ原の戦い後、全国をほぼ手中に収めた徳川家康も国絵図の作成を命じています。以後幕府は数度にわたり地図の作成と提出を命じ、さまざまな情報を地図から得ることで実効支配につなげていきました。それは諸大名に対して幕府の権威を公認させる目的もありました。

元禄下総国絵図

国立公文書館蔵

元禄 15 年(1702)作成。391cm×501cm。幕府は国絵図と郷帳（各村ごとに石高を記載したもの）の作成、提出を命じました。狩野派の絵師によって清書されています。村は小判型で郡ごとに色分けされ、石高が記されています。関宿城を白四角で表し、「牧野備前守」（牧野成春）と書かれています。

諸国城郭絵図のうち下総国世喜宿城絵図（複製）
当館蔵　原品は国立公文書館
正保元年（1644）から明暦元年（1655）作成。315 ㎝×216 ㎝。江戸幕府が諸藩に対して、国絵図、郷帳とともに、城絵図の作成、提出を命じました。軍事機密である城郭内の建物や石垣の高さ、堀の幅、水深などや、町割、田畑の位置などが描かれています。「牧野佐渡守」（牧野親成）の名が記されています。

Ⅲ　変化する土地

江戸時代には大規模な土地の開発が行われ、長い時間をかけて河川の流路変更や、海・湖沼の干拓が行われました。新たな街道の開通や河川の瀬替（せが）え、湖沼の開発等によって新しい町や村・新田畑が出現するなど土地の有り様は変化していきました。

とりわけ関東においては、江戸湾に流入していた利根川の本流を銚子沖に流れを変え（利根川東遷（とうせん））、これに連（つら）なる江戸川などの大河川も流路を変え土地が大きく変化していきました。

特に関宿城の周辺地域は変化が大きいものでした。その結果、関宿は多くの河川が合流・分流するところになり、水運が発達し河岸が栄えました。

土地の変化も、地図を時代順に追っていくと読み取ることができます。

下総之国図（複製）（部分）
当館蔵　原品は船橋西図書館蔵
元和（1615～1624）初期作成。利根川の本流が江戸湾に流入し、まだ赤堀川は開削されていません。権現堂川と逆川が開削され、逆川を経由して後に利根川本流となる常陸川が銚子沖まで通水しています。江戸川（太日川）は野田辺りから流れ始めています。

Ⅳ　さまざまな地図

江戸時代の社会の安定によって、支配者以外にも多くの人々に地図が浸透していくようになりました。例えば、参勤交代（さんきんこうたい）によって江戸と国元を往復する諸藩士は、道中の距離や宿場等の広範囲な地図と、江戸市中の地図を必要としました。

また、江戸時代には伊勢参り（伊勢神宮）などの旅行がブームになり、観光案内のために地図が作られるようになりました。

庶民にとって身近なもの、楽しむものとして、地図が作られるようになりました。

江戸図　　当館蔵

嘉永７年（1854）刊。江戸城を中心にした江戸市中を描いた絵図です。諸藩の大名屋敷や寺社、街道、河川なども描かれ、江戸の町の賑わいが感じられます。関宿藩上屋敷は「くぜやまと」（久世大和守）と「久世鷹の羽根」の家紋と一緒に記載されています。

大日本早引細見絵図　　当館蔵

天保 13 年（1842）刊。。大きい絵図（37 ㎝×130.5 ㎝）ですが、畳むと小さくなります(19 ㎝×9 ㎝)。旅に携行し、すぐに見られるようにしていました。街道や距離、駄賃などが描かれ、観光案内用に作られました。

Ⅴ　ふるさとの変遷

明治政府は近代国家整備のため、測量や印刷などの技術者を欧米から招聘（しょうへい）し、地図そのものの近代化に着手しました。縮尺や土地の様子がより正確になり、また統一された地図が作られるようになりました。以後、技術の進歩は目覚ましく発展し、政府以外にも民間によるさまざまな地図が作成されました。

迅速測図（原図）（フランス式彩色地図）
出典：第一軍管地方二万分一迅速測図（原図）を当館で一部加工して作成

明治 17 年(1884)に陸軍はフランス式の軍制に変更されました。原図は手書きで彩色され、視図と呼ばれる絵が描かれています。境河岸には結城や古河、銚子、那珂湊へ行く道路が集まります。境河岸から利根川を挟んで関宿台町・関宿江戸町、江戸川対岸の向河岸・向下河岸にかけて街区が集中します。関宿城跡の多くが畑に変わっていますが、町並みは旧城下町の名残を残しています。

エピローグ

現在、全国で公共交通のサービス向上やバス路線の廃止対策として、自動運転バスの実証実験が行われています。これを支える最新技術の一つが高精細地図です。また、全国で整備が進むハザードマップを基に、一人ひとりのマイ・タイムライン（防災行動計画）作りが推奨されています。近年の気候変動に対しては、将来の気温・降水予測図等も公開されています。こうしたシュミレーションマップ（未来予測図）を参考に、一人ひとりの行動が大切になってきています。私達は江戸時代と比べてずいぶんと進化した地図を手に、未来をつくっていくことが可能になっています。

重ねるハザードマップ

出典：国土交通省国土地理院「ハザードマップポータルサイト」

土地の成り立ちや地形・地盤の特徴、過去の災害履歴などの情報をもとに、自然災害の被害軽減や防災対策のために、洪水や土砂災害、津波等の被災想定区域や避難場所などを表示しています。